

## 「集団的思考と危機 I —1930 年代の中井正一—」

門部 昌志

Collective thought and crisis : Masakazu NAKAI in 1930's

Masashi MOMBE

**概要** 本稿は、機能概念を中心として、一九三〇年から一九三〇代半ばに至る中井正一の軌跡を再構成するものである。中井は、機能概念の撰取により、関係論的思考や形而上学的区別への批判を導入する。機能概念をめぐる探求は、集団論へと展開するが、集団における共同性や逆関係の否定性なども言及される。集団をめぐる探求は、思想的危機における芸術の動向の考察を通じて深化する。

**キーワード** : 機能概念, 集団, 危機

一九三〇年代初頭、美学者の中井正一（一九〇〇—一九五二）は、機能概念を導入した。関係論的な世界観を含むこの概念の受容によって、彼は、自然や人間、そして集団や機械などを、相互規定的な諸要素の関係として把握するようになる。本稿は、この機能概念を一つの手がかりとして中井の思想を再考するものである<sup>1</sup>。ただし、この言葉が、様々な領域において、多義的に用いられることは、厄介な問題をひきおこす。中井を再読するのであれば、まず、この語から喚起される一般的なイメージを留保した方がよいだろう。その上で、「機能」という言葉が彼の思考にいかん導入され、読みかえられ、どのような思考の変化をもたらし、いかなる仕方で彼が距離をとったのかを辿り直す必要があるのではないか。

機能概念の導入により、中井は関係的思考を撰取した。この概念はまた、形而上学的区別の批判に通じるものでもあった。たとえば、彼の論考では、主観と客観の固定的区別が批判されている。実体としての主観の解体という認識を前提として、中井は集団的思考を探求したのであり、彼はまた言語媒体への関心も有していた。これらの問題は、二〇世紀後半にヨーロッパ大陸の思想家たちが探究したものと重なるように思われる。

そうした交差は、おそらく、偶然の産物であるのだろう。ただし、このような問題意識の重なりは、中井に限られるものではない。より一般的な文脈で、一九二〇年代、三〇年代の問題意識と二〇世紀後半のそれとの相似が指摘されることは周知の通りである<sup>2</sup>。中井の著作を再読することは、二〇世紀の思想が胚胎した時代を生き、思考を発展させた人物の著作を再読することである。それはまた、二〇世紀の思想の源流を再考する機会へと開かれている。

注意すべきは、〈源流〉のイメージが、事後的に形成され、過去に投影されるということである。従来の中井年代論ないし三〇年代論は、様々なアクチュアリティをこの時代に読み込んできた。極端な場合、読み取られるものが、自らの望んだイメージにすぎない場合も考えうる。本稿では、このような行き過ぎから身を引き離そうと努めたつもりである。

しかし、中井研究においては、現代的関心を禁じて過去のコンテクストに専心する読解を無批判に特権化すべきとも思われぬ。「委員会の論理——一つの草稿として——」

（以下、「委員会の論理」とする）は一つの提案だったのであり、その吟味や批判、新たな提案などが読者に期待されているからである。中井の論考を解釈する作業が何等かの意義をもちうるとすれば、この一連の過程の中に位置づけられることによってであろう。

以下では、中井のテキストを読み直し、その周囲に広がる思想の水脈をたどる。そこから、現代的問題との重なりのみならず、相違が浮かび上がるかもしれない。本稿の課題は、先駆的思想家というイメージを遡及的に構成することではなく、過去と現代の〈対話〉を行うことである。中井の論考を介して多様な思想の水脈をたどり、その現代的な意味を読みとること、また現代と異なる仕方で考える手がかりをも模索することである。

二〇世紀後半の思想との関連性は、中井を再読する理由の一つである。ただし、三〇年代の思想が再検討されるのは、中井に限ったことではない。京都学派が再読されているのは周知の通りである<sup>3</sup>。そうしたなかで筆者が中井を読み直すのは、彼の探究が、集団的コミュニケーションやメディアに関連するからである。中井においては、実体としての意識という観念の危機についての認識とともに、対話としての集団的思考が探究されており、そこには身体感覚に作用するメディアの問題も含まれている。この探究は、論理的研究にとどまるのではなく、近代性の深化と反転が知にもたらした危機的状況に対峙するものでもあった。専門化過程の徹底化によって逆説的に知の貧困が生み出されるという状況があり、中井は集団的思惟に関する思索を深化させることで思想的危機を乗り越える方途を模索した。映画における集団的組織化の動向を一つのモデルとして、彼は機械を含む集団的思惟の機構を素描する。三〇年代前半の探究を経た中井は、一九三六年に「委員会の論理」を発表する。

現代において、「委員会」という言葉は、もはや思索を誘う力を失っている。委員としての個人が集まって議論する

という、実体的理解によって中井の〈委員会〉を把握することは困難である。機能概念の導入と集団論への適用、そして機能概念の限定的批判など、「委員会の論理」の前提として考慮すべきことは数多い。三〇年代前半に中井が発表した論考を補助線とすれば、多様な角度からこの言葉に光を照射しうるはずである。

以下では、一九三〇年から一九三六年までのテキストを主な対象として中井の思考をたどる。それは、機能論と存在論の批判的摂取から集団論や集团的思考についての分析に向かうものであり、「委員会の論理」として結実する。第一章では、主として中井における機能概念の受容とその帰結を検討する。機能概念の導入によって彼は、〈関係的思考〉の導入や形而上学的区別への批判を試みた。実体としての意識という観念への批判は、機械的技術に結びついた集团的意識という論点に通じるものであった。第一章では、さらに、機能概念を導入する一方で、中井が存在論を摂取していたことについても論じる。第二章では、中井における〈集団〉および〈集团的思考〉に光をあてる。彼の文章では、機能論を背景として、相互規定的な関連形態として集団が位置づけられ、時には、存在論的タームによって集団が論じられている。しかも、中井における集団は人間のみからなるものではなく、機械を含みうるものとして考えられていた。集団についての考察は、集团的思考の探究に通じている。そのモデルを中井に提供したのは芸術における集团的組織化である。第三章では、この集团的思考の探究の背景を扱う。中井は、近代の商品化や専門化が思想と芸術にもたらした否定的帰結について述べ、また純粋芸術の危機について指摘した。しかし、中井は、集团的組織化の動向を全否定するのではなく、それに追いつき、追い抜くこと、そして「よりよき組織化」のあり方を模索した。第四章では「委員会の論理」における集团的思考を検討する。「委員会の論理」において中井は、機能的論理を限定的に批判するようになり、集团的思考のモデルは分裂を孕んだものへと変化する。以下では、まず、初期中井における言語論から機能論への問題系の推移から確認したい。機能概念の問題系を、当時の中井における様々な問題系との関連から切り離すことを避けるためである。

## 一 中井正一における機能概念

### 関係的思考の方へ

『判断力批判』の翻訳に取り組んでいた深田康算<sup>4</sup>のもとで学んだ中井は、「カント第三批判序文前稿について」（一九二七年）を発表したのち<sup>5</sup>、論文「言語」（一九二七年九月および一九二八年四月）を発表している。後者の論考で列举される哲学者には、E・カッシーラーが含まれており、注のなかでも、言語を主題とする『シンボル形式の哲学』第一巻が言及されていた。さらに、中井が言語や言語活動について研究した時期は、ソシュールの『一般言語学講義』が小林英夫

によって翻訳され、『言語学原論』（一九二八年）として出版された時期と重なっている<sup>6</sup>。中井の論文「発言形態と聴取形態並にその芸術的展望」（一九二九年）は、『言語学原論』の刊行から約一年後に発表された論考であり、わずかながら、ソシュールへの言及がある。しかし、この論考で中井が中心的に論じたのは、現象学者、A・ライナッハによる、主張と確信の区別に関する議論であった。知られるように、中井は一九五二年に他界している。一九八〇年代以降、ライナッハが言語行為論との関連で再読されることなど、中井は知るよしもなかったのである<sup>7</sup>。

『判断力批判』の研究、言語や言語活動に関する論文、そして僅かな書評。一九二〇年代半ばから一九二九年にかけての中井の論考は、いずれも『哲学研究』に発表されているが、後年と比較すると寡作のように思われる。しかし、一九三〇年になると、中井は、数多くの文章を発表し始める。新聞や同人雑誌『美・批評』、さらに『思想』など、媒体は多様化し、発表される文章も増加する。当時の中井の文章を読む者は、ときに従来の問題と重複するものの、新しい問題への関心を感じとるかもしれない。言語や文学、探偵小説、絵画、機械美、集団美、スポーツなどを論じた彼の文章には、「フンクチオン」や「機能」といった言葉が、時折、用いられているからである<sup>8</sup>。この一九三〇年は、『実体概念と関数概念』（一九一〇年）におけるカッシーラーの議論を手がかりとして、中井が本格的に〈機能〉概念を導入した年であった。ただし、別の対象を論じるために、機能に関する言葉が援用される論考は、機能概念の説明としては断片的な印象を与えるかもしれない。そうした論考の中で例外的な位置を占めるのは「機械美の構造」である。一九三〇年二月号の『思想』に掲載されたこの論考では<sup>9</sup>、「構成概念 Funktionsbegriff」という表記が採られていたとはいえ、道具や機械、感情移入に関する機能論的見方の萌芽が見られる点は特筆に値する。

一九三〇年の後半になると、構造ではなく機能という言葉が<sup>10</sup>、中井による論考のタイトルに現れる。中井は、まず、『美・批評』創刊号（一九三〇年九月号）の巻頭に「機能概念の美学への寄与」を発表、その後、同名の論考を『哲学研究』（一九三〇年十一月号）誌上で発表する。二篇に及ぶ「機能概念の美学への寄与」のうち、『美・批評』に掲載された論考は簡潔であるのに対し<sup>11</sup>、『哲学研究』に発表された論考は、より長大になっている。以下で主に検討するのは後者である。その前半部分では、『実体概念と関数概念』におけるカッシーラーの議論がとりあげられている。カッシーラーの Funktionsbegriff は今日「関数概念」と訳されているが<sup>12</sup>、『哲学研究』に発表された「機能概念の美学への寄与」では、概ね「機能概念」と表記され、時に「函数」と記されている。以下、第一章では、中井におけるカッシーラー受容に注目しつつ、中井における機能概念を検討したい。

中井は、カッシーラーに依拠しながら、実体概念の問題を

整理する。中井によれば、従来、実体概念における概念形成は以下のような手続きでなされてきた。まず、数多くの性質をもつ「個々独立の物」が仮定され、それら独立の物の性質から、「多くの物に共通なる性質が抽象」される。その性質をひとつの類へと結合するとき、概念が誕生する<sup>13</sup>。この手続きをより高い水準にまで繰り返すことで成立するのが概念ピラミッド（「概念角錐」）である。概念ピラミッドにおいては、概念の意味内容が少なくなるにつれ、適用範囲が拡大する。したがって、概念ピラミッドの頂点は、〈あるもの〉（Etwas）という抽象的な概念に帰着するのであるが、カッシーラーも指摘するように、「もっとも普遍的な概念は、つまるところ、もはやならん特筆すべき特徴や規定性を持たないということになる」<sup>14</sup>。このような概念形成に対して、中井は懐疑的である。というのも、科学的概念に求められるのは、「内容の厳密なる一義的規定」だからである<sup>15</sup>。ロッツェの例をあげるなら、「桜の実」と「牛肉」を、「赤い水気のある物体」と呼んだとしても、妥当な論理的概念に到達したわけではなく、それは意味のない言葉の結びつきにすぎないのである。

このような陥穽をもつ実体概念にかかわって提示されるのが、カッシーラーにおける関数概念（Funktionsbegriff）である。集合の要素と数値の関係よりむしろ、美学や技術に関する問題を論じた中井は、この概念を「機能概念」と表記している。中井研究を一次的課題とする本稿では、「機能概念」という、彼の言葉を考察の主対象とする。まず確認したいのは、中井における機能概念と関係的思考の関連である。この関係的思考とは、関係についての思考一般のことではない。たとえば、事物に対して関係の範疇を「従属的」なものとし、関係は事物に「事後的」で「外的な変様」を与えたとする議論は、本稿における関係的思考ではない<sup>16</sup>。独立して存在する実体からではなく<sup>17</sup>、概念対象間の関係から出発する思考が、本稿における関係的思考である。中井の論考において、このような思考が見出されるのは、次の一節である。

「此の『物』とは、決して凡ての関係以前の独立な存在を意味しない。[……] 機能的関係によつてのみその全体の内容を得るものなのである」<sup>18</sup>。ここにおいて、「物」は実体として捉えられてはならず、「機能的関係」という言葉は、関係に先立ち、それ自体で独立して存在する実体とは異なるものとして用いられている。中井の「機能」という語は、〈関係的思考〉に通じているのである。

機能概念への移行に伴い、中井は他の概念も再考する。第一に、組織における要素は、「全体の部分」としての大きさではなく、「互いに規定し合ふ関連の組織に融合する函数形」とされる<sup>19</sup>。第二に、等しいということは、機能の論理では、量的なものではなく位置的な等値性、つまり「一つの集合要素の他の集合要素への対応的關係」を意味することになる。

## 可動の境界

『美・批評』版「機能概念の美学への寄与」では、相互規定的な関係にある諸要素の複合として機能概念が素描されていた。『哲学研究』版「機能概念の美学への寄与」では、それに加え、形而上学的区別が批判されるようになる。「形而上学の犯した罪は、単にそれが認識論の領域を踏み越えたこと」だけではない。形而上学は、「認識の領域内に於ても、函数的関連のもとにある分離すべからざる要素を、不当にも分離して考へ、論理的相関性にあるものを物的対象として扱ふごとき誤謬を犯してゐる」。批判されるのは、認識において相互規定される観点を分かちことで、論理的に相関するものを物的に対立するものに再解釈する形而上学の手続きである。形而上学は、主観と客観などを対立したものと論じることがしばしばであった。また、今日における唯物論的見解にも形而上学的区別が見られるものがある<sup>20</sup>。このように、中井は、形而上学的区別についての批判的洞察を転用し、ある種の唯物論をも論じたことになる。

ただし、あらゆる区別が拒絶されるわけではない。カッシーラーは、「不動の境界」を前提とする思考に対し、「不断に移りゆく可動の境界」を前提とする思考を提示した<sup>21</sup>。同様の議論が中井の論考にある。「カッシーラーに取つては現在の状態は過去のそれに対して客観的と考へられると同時に、現在の状態は未来のそれに比して主観的と考へられる」<sup>22</sup>。もっとも、以前に客観的と見なされたものが客観性を全て喪失して、完全に主観的なものとなるわけではない。ここでは妥当の階段性があり、前に無制約に妥当であったものが一定の範囲に制約されることになるのである。また、形而上学の見方では、主観と客観の連続はできないのに対し、機能的見方からすれば、主客は「分離すべからざる函数的関係」にすぎず、比較される他のものとの関係によって一つの事柄が主観的とも客観的とも考えられるというのである。

## 中井における機能概念の諸相——道具／身体／集团的知覚

機能概念の導入を契機として、事物は実体としてではなく、相互規定的な関係にあるものとして把握された。この立場はまた、論理的相関物を物的に対立するものに再解釈する形而上学的手続きの再検討を要請するものでもあった。このような帰結をもたらした機能概念を導入する際、中井が手がかりとした、カッシーラーの『実体概念と関数概念』（一九一〇年）は数学および数学的自然科学の領域に関する研究であった。その後、カッシーラーは、『シンボル形式の哲学』で生命の領域へと対象を拡大した。この著作については、中井自身も「機能概念の美学への寄与」（『哲学研究』）で言及しているが<sup>23</sup>、カッシーラーにおける研究対象の拡張を意識しつつ、中井は、カッシーラーとは別の側面より、技術や芸術の問題に機能概念を転用したものと思われる<sup>24</sup>。

次に、中井における道具や技術についての議論を確認しよう。機能論理では、各要素は機能とみなされ、要素は相互

に規定しあうものと考えられる。そうした諸要素の複合が一つの機能概念を構成する<sup>25</sup>。その例として、中井は窓をとりあげる。機能概念における窓は、多くの記憶されたイメージの重複と忘却による抽象化に基づくものではなく、「照明、通風、展望度」という三要素の複合的構成体である。また、機能概念において特殊な類型を生み出すのは、各要素のパーセンテージの増加や減少である。たとえば、水上での「攻撃、防御、運搬、居住」といった諸要素の複合によって構成される軍艦の類型を中井は説明する。攻撃と防御に関する要素の割合が多い場合は、戦闘艦の類型となるのに対し、運搬に関する要素の割合を増加させると、巡洋艦などといった類型となる。居住に関する要素を増加させると戦闘に関する要素は減少する。それら各々の要素が運搬に関する要素と争っている。中井は、これらすべての要素の「函数的複合」を、「概念の構造」と呼ぶ<sup>26</sup>。

その論題が示すように、「機能概念の美学への寄与」において中井は、機能概念の美学的問題への応用を試みている。単純感覚の問題や<sup>27</sup>、現実と仮象の並列的対立への批判等々である。ここでは、総ての論点を取り上げるのではなく、中井における〈射影〉や〈自我〉について確認したい。中井によれば、従来の感情移入論は「自我を一つの固体と考へ、客観を一つの実在的存在と考へ、その客観の中に『自我』を見出すと云ふロマン的思想の後継者」であったという<sup>28</sup>。これに対し、中井は、物、自我、そして感情移入を、実体論とは異なる文脈で論じる。すでに「機械美の構造」において、人体と自然の双方は機能概念的に把握されており、二つの構成体が相似である場合、「フンクチオンの関連的連続」に、中井は感情移入の悦びをみいだしていた<sup>29</sup>。『美・批評』版「機能概念の美学への寄与」では、「感情移入が、身体的機能構成と自然的機能構成の連続的関連として解釈される確かなる可能性」が示唆される<sup>30</sup>。『哲学研究』版「機能概念の美学への寄与」では、身体と山岳の例が示されている。垂線に対して山岳の稜線が関係の構成を描きだすとき、尺度としての身体によって、人は山を測る。自然構成は身体的構成へと射影され、換算される。身体が自然を測ることで可能となる「等値的情趣評価」が、中井における〈感情移入〉である。この時期の中井は、「換算」や「射影」という言葉を、機能的関係において把握された構成体の関係について用いている。〈自我〉は、「相似的關係の無限なる射影にあたって、かゝる複雑なる関連をして可能ならしむる關係そのもの」である<sup>31</sup>。ここでは、物のみならず、自我までもが関係へと解体されている<sup>32</sup>。

「機能概念の美学への寄与」で中井は、自我と物、感情移入を機能概念的な文脈へと配置したのち、身体と機械を論じている。身体は、一方では自然であり、他方では自我でもあるような、興味深い「構成体」である。身体はあらゆる「機能の複合体」であり、その機能を補い増加させるものが道具と機械である。道具は「身体の拡大射影」であり、機械はさ

らに身体の機能を拡大する。

原文ママ

飛行器と人の跳躍、艦船と遊泳、レンズと眼球、ラジオと鼓膜並に声帯等々の構成は自然構成より道具、道具より機械への機能拡大への過程である。そしてすでに後者の領域ではその表現及感受の凡てが、個人意識の領域を越えて、集団構成の社会性の上に成立する。そこに身体構成は分ち難き溶融をもつて社会的集団構成の中に浸潤して行く<sup>33</sup>。

身体の機能を拡大するものとして道具や機械を位置づける見解は、必ずしも斬新なものではない<sup>34</sup>。ここで留意すべきは、一般に、個人に属するものとされる「表現」および「感受の凡て」が、引用文では「集団構成の社会性の上に成立する」と書かれている点である。「機能概念の美学への寄与」では、主観／客観の固定的対立や実体としての個人意識への批判がなされたのちに、集団、身体、機械が言及される。中井において、表現と感受は独立した個人意識という観念から解き放たれており、知覚は、機械を含めた社会的な集団構成において把握されている<sup>35</sup>。機械が身体を拡大する時代において、身体は社会的集団構成に結びつくという見解の背後には、身体、技術、知覚についての関係論的見方がある。この問題系は、戦後の論文「芸術に於ける媒介の問題」に引き継がれる<sup>36</sup>。

今や、歴史的段階は、個人的意識段階を乗り越えて、集団的意識段階に向いつつある。射影機構は、機械的技術の中に含めて、レンズ、フィルム、電話、真空管、印刷等の機構を貫いて、物質的感覚とも云うべきものが、集団人間の感覚として、表現、観照の要素となりはじめた。それ等の感覚要素を素材として委員会と云う近代的集団思惟の機構は、個性単位の意識を越えたる新たなる性格を、人間社会に導入するに至った。<sup>37</sup>

委員会は、「個性単位の意識を越えたる新たなる性格」である。その前提には、まず、実体化された個人意識という観念に対する批判がある。さらに、委員会は機械的技術を含めた集団的思惟の機構として位置づけられている。レンズやフィルム、電話や真空管、印刷などによって生じる物質的感覚が集団の知覚として捉えられる。これらの見方は、機能概念との関連で委員会に光をあてることに由来する。しかし、中井の機能概念批判をはじめ、唯物論や存在論なども考慮する必要がある。

## 機能の論理と生命の奔流

一九三〇年、機能概念を導入する作業と並行しつつ、中井は存在論に関する論考を発表している<sup>38</sup>。カッシーラーと対

極の立場にあるとみなされる M・ハイデガーにも、中井は関心を抱いていたのである。一九三二年の「ノイエ・ザツハリツヒカイトの美学」で中井は、カッシーラーとハイデガーの双方を論じている。中井によれば、実体概念が批判されて「主観と客観の対立が解消される場合、「数学化への方向」と「現象の生命的具体的解釈学への方向」という、二つの道がある。カッシーラーとハイデガーについて中井は、両者が対極に位置していると見なす。にもかかわらず、両者の間には、「連続せる曲率」が流れていると中井は述べる。カッシーラーの『シンボル形式の哲学』において、「数的厳密性より出発して具体的生命へと彼は降りて来たのである」<sup>39</sup>。他方、ハイデガーは「具体的生命そのものの自照より出発して、本質構造にまで昇り行かんとするのである」。見解の平均化を拒み、対立する両者において、中井は連続性を見いだそうと試みた<sup>40</sup>。

さらに中井は、函数性と実存在の「深い連絡」に着目し、ある場合には「命の中に、実存在の中に函数は自らを涵してゐる」と述べている。「一度函数性が生命に等值的射影をエグジステンチエルに移動したとするならば、堤はすでに決せられたのである。滔々たる生命の奔流が、乾いてゐた整然たる掘割に、満ち漲りあふれほとばしるのである」<sup>41</sup>。函数と生命に言及した後、中井は「射影」を再定義する。それは「認識と対象との一致〔……〕のみを指さない」。「射影」は「一つの邂逅」であり、「行為に於て発見されたる関係の構造」である<sup>42</sup>。それは「ありかた existentia」によって「それが何であるか essentia」を把握することである。

中井は、機能論と存在論の相補的利用を継続していくが、各々に対する評価は時期によって変化する<sup>43</sup>。「模写論の美学的関連」（一九三四年）では、機能論と存在論の双方で実体論的な「主観客観の考へ方が解体してゐる」と中井は共通点を指摘するが、「機能概念より存在論への移行き」にも言及している<sup>44</sup>。ハイデガーにならって中井は述べる。「機能の概念は アルティキュラーレン 分節された骨組にすぎない」と。

一九三五年になると、中井の文章からは存在論への警戒感が窺えるようになる<sup>45</sup>。しかし、戦後には、それも希薄なものとなる。一九五一年に刊行された『美学入門』に「解説」を記した久野収も、中井が「機能主義美学に詳しい」と書くに止め、「一番重要な特色は、ハイデッガーとベッカーにはじまる実存主義美学のわが国における開拓者たる点にある」と述べていた<sup>46</sup>。この記述は、サルトルが日本に紹介されていたことを背景にしているが、ここで確認したいのは、中井において、機能論と存在論という二つの思考がせめぎあっていたということである。

## 二 中井における集団と集团的思考

### 関係性、共同性、逆関係的否定性

中井において、集団は重要な問題の一つである。日常的に用いられるこの言葉を、彼が独自の文脈に配置していることは留意すべきである。二篇に及ぶ「機能概念の美学への寄与」を発表した年、中井は「集団美」という文章を書いている。遺稿からみいだされ、一九三〇・五・十五という日付の記されたこの文章で、中井は集団について述べている。

公衆の言葉の感じには、一つの中心に関連をもつ「混沌としての多数」の意味がともなっている。しかし、集団の言葉の感じには、フンクチオン機能とそのコンプレックス複合、すべてがそ

の要素であり、その要素相互間の統制による「秩序としての多数」の意味がともなっている。どこかに中心体があるのではない。むしろ固体が常に重々無尽に全体に浸み透っているところの一つの関連形態である<sup>47</sup>。

フンクチオン「機能」という言葉が示すように、集団は、単に実体としての個人が集まったものではない。それは要素相互間の統制による「秩序としての多数」でありながら、しかも、「中心体」を欠いた「関連形態」である。

集団を論じる際、中井は、しばしば、具体的な対象に言及し、それに応じて集団の異なる側面が照射される。ここでは、まず、スポーツに注目しよう。ボートのチームについて中井は述べる。「自分と云ふものは他のシートとの各々の特殊なる機能と部署に従つて、共同相互存在としてのみその存在の意義をもつのである。しかも、スポーツに於て浮上り来るものは〔……〕むしろその相互の共同性そのものなのである」<sup>48</sup>。ここで中井は、機能概念と存在論的タームを併用しつつ、スポーツの共同性を論じている。彼はさらに、チーム間で生じる妨害行為を論じる。ランニングやボート、水泳などは一方向的であるの対して、サッカーやラグビーなどは「逆方向すなわち妨害行為を含んでいる意味で二方向的である」<sup>49</sup>。後者には逆関係的否定性が含まれている。

このように、集団の共同性のみならず、チーム間の対立についても中井は指摘していたのである。これらの記述は単なる妨害行為についての指摘と見なすべきではないだろう。論じられているのは、「関係の構成」として把握された集団間の葛藤なのである。

初期中井における集団は、関係論的思考を背景に考えられている。一方では、機能概念と存在論的タームを併用して集団内の共同性が論じられる。他方では、そのみならず

「関係の構成」としての集団間の葛藤が、逆関係の否定性が論じられるのである。

### 人間性と機械性の複合

一九三一年、『美・批評』（三月号）に掲載された「集団的性格の断片」で辻部政太郎は、雑誌や新聞を論じている<sup>50</sup>。その二ヶ月後、中井は、論文「物理的集団的性格」を同じ『美・批評』（五月号）に発表する。中井は、映画制作を注視しながら、集団性としての「社会的集団的性格」に対して、機械性と人間性の複合という形式を「物理的集団的性格」と名づけている<sup>51</sup>。中井によれば、社会的集団的性格と物理的集団的性格は相互的な関係にある。一方で、機械などといった物理的集団的性格の構成体は、社会的集団的性格によって産出される。他方、レンズとフィルム、真空管は、人間の感覚に浸入し、「社会的集団的性格の神経組織」となる。

中井における集団は人間性と機械性の複合とみなされていた。それは、異種混濁的と呼びうるであろうか。しかし、中井は、人間性と機械性を相似的なものとして捉えている。「物理的集団的性格」において、組織意識とは「一つの集団の欠くべからざる位置づけに於て自我をハッキリ見出すことである」。他方、機械の構成は「機能的、いはば函数的」であり、「機械の構成体の一部をなす歯車の一回転も、その全組織の構造の欠くべからざる一要素である」<sup>52</sup>。したがって、個人は社会的集団的性格の一要素であり、歯車は物理的集団的性格の一要素である。中井は、組織と機械の双方を相互規定的な関連体と考え、社会的集団的性格と物理的集団的性格は相互等值的であるとする。「機械美の構造」（一九三〇年）では、自然や人間を機械と考える発想が示されていた。「自然界の組織の数学的解釈と分析は自然科学の報告が示すごとく、深い最も深い機械であることを告げてゐる。殊に人体の生理の示すがごとく『人間』は機械の出発点であるとともに深い機械の小宇宙であらう」<sup>53</sup>。これは、自然と人間のなかに、隠喩としての機械を見出す思考である。人間性と機械性の複合からなる集団は異種混交的と思われる。しかし、中井の機能論的な眼差しは、両者の異質性ではなく、相似性の方を重視するものであった。

### 芸術の集団的組織化と集団的思考

人間性と機械性の複合は、映画制作の特徴である。一九三二年の「思想的危機に於ける芸術並にその動向」で中井が述べるように、映画に見出せるのは「レンズを眼とし、委員会を決意とし、企画をその夢想とし、統計をその反省とするところの一つの利潤的集団的機関である」<sup>54</sup>。映画における集団的組織化に言及したのち、中井は、集団的思考のモデルを素描する。それによれば、個人における被投（Geworfen）の機能として「記憶」があるが、集団においては「記録」がある。個人における投企（Entwurf）の機能である「構想」は、集団の「企画」に対応する。個人における技術が「身心の関

係」にあるとすれば、集団における技術は、「機械」や「組織と統制」に対応する。個人の「思弁」は、集団における「委員会的討議」であり、個人における「反省」は、集団では「批判会」である。

個人主義機構と集団主義機構を対比的に記述したのち、中井は新たな美学に言及する。個人における快・不快の感情が従来の美学の出発点であったのに対し、集団のレベルでそれに対応する感覚を中井は「組織的感覚」と呼ぶ。それは個人と物の中で生じる感情移入ではなく、組織的複合における相互規定的な諸要素と自己の間で生起する感覚である。これは静態的な機能的関係についての感覚ではない。中井は、組織的感覚を、闘争的な圧力のつりあいによって構成される感覚とし、その例として、ラグビーの二つのチームが展開する力学的秩序において感じられる、身を沈めるような組織感を提示する。中井における集団が人間性と機械性の複合である以上、組織感は機械にも関連する。「新聞、映画、ラジオ等の機械と組織をその技術とするところの快感」や「編集、モンタージュ、組立て等のもつ美感」といった表現にそれは示されている。個人と物の中で生起する感情移入に対して、中井は、集団の一要素としての自己と機械の組織との間で生起する組織感を対置するのである。

一九三二年の「思想的危機に於ける芸術並にその動向」では、組織における快が頻繁に言及される。それは特定領域に限定された議論であり、また、理想として論じられているのであろうが、危うさを孕むようにも思われる。さらに、個人と集団の対比はやや図式的である。しかし、以下の点でこの論考は重要である。この論考で素描された集団的思考のモデル（「集団主義機構」の分析）は「委員会の論理」に組み込まれており<sup>55</sup>、また、思想的危機の問題は、術語の変更を経て、「委員会の論理」で再論されている。「委員会の論理」を論じる前に、私たちは、この思想的危機の問題を考察することにした。

## 三 思想的危機と近代性

### 二つの思想的危機

論文「思想的危機に於ける芸術並にその動向」（これ以降、危機論文と略記することがある<sup>56</sup>）において中井は、芸術の集団的組織化に対応する新しい美学と集団的思考のモデルを素描した。この議論に、私たちは、文化における危機の問題を見いだすことができるであろう。cultureという言葉は、農作物の栽培や動物の世話といった初期の用法をはじめとして、精神の修養、芸術、民衆文化、生活様式、意味付与实践など、多様な意味で用いられる<sup>57</sup>。これに対して、危機論文で中井が論じたのは、思想と芸術の危機である。そこでは「精神文化の専門化」や「職業化」の帰結が議論され、さらには芸術における創作的構造の転換が、また、個人主義的機構から利潤を目的とした集団主義機構への転換が論じられ

ていた。

中井が危機論文を発表したのは一九三二年である。一九三六年には、戸坂潤が「文化の危機とは何か」と題する小論を発表し、ファッションの文化政策を進める口実として「文化の危機」を強調する風潮について指摘している<sup>58</sup>。文化的危機をめぐる言説に対して中井の危機論文が果たした役割をここで分析することはできないが、少なくとも、中井の危機論文は、その企図においてそれらの言説と異なることは明らかである。以下では、危機論文における主題と近代性との関連を確認したい。

論文の冒頭では、二通りの思想的危機が言及される。第一は、機械化と大衆化を「文化の仇敵」として憎悪する人にとっての思想的危機である。これらの人々は、鉄と歯車で人間の血汐を搾りとる残忍な機械、また、みすばらしい衣服の俗衆などのイメージを想像するという。その背景は、機械と大衆によって文化に危機がもたらされるという恐れである。批判の対象である思想的危機の見解を、中井は戯画的に描写している。物質的機械化に文化の危機をみいだすこのような見解に対し、中井は精神的機械化の方により大きな危険があると看做す。精神的機械化とは「精神文化の専門化」であり、その「職業化」である。この分化にそって技術的な専門化も進行する。これらの過程の中に、中井は、人間の一般的機能化の影響をみいだす。それが文化に及ぼす影響は〈大衆化〉である。ただし、これは、通常の意味の大衆化ではない。文化における専門化の進行により、逆説的ではあるが、「各々の領域に於ける専門家は他の領域に於て専門外」であるという事態が生じる。精神的機械化ないし文化の専門化によって「凡ての専門家は凡ての他の機能に於て俗衆である、と云ふ構造をもつて来る」<sup>59</sup>。この論考では、専門家と大衆は対極的に位置づけられてはいない。中井の見たところ、「思想的危機の罪」は、物質的な機械や大衆にあるのではない。それはむしろ、「精神的機械化」としての科学の孤立や「時代相への孤立」にあり、また、相互に大衆化していることを意識しない「精神的貴族化」にある<sup>60</sup>。

思想的危機の意味を示したうえで、中井は思想と芸術において進行する精神文化の専門化と大衆化について述べる。彼によれば、真なるものの領域では、思索は職業となり分業が進行している。「思索機能の商品化」は「繩張の現象」や思想の「類型化標準化」をひきおこしており、「自らへの批判」という重要な任務が雲散霧消するという、「思想そのもの」危機が生じている。次に、美の領域では、芸術の創作

的構造が利潤機構と集团的組織によって再編制されることにより、個人的ロマン主義が掲げた天才と創造と美の観念は自己矛盾に陥り、「空疎な抽象」と化してしまっただ。個人主義勃興期において封建主義に対抗するために確立された際、ロマン主義の「天才」と「創造」と「美」の観念は「正当な権利」を持っていた。しかし、それは次第に「放恣」と「個人性」と「非眞実性」に重要性を付与する危険性をはらんできたのである。

### 近代の影

知的領域における分業、あるいは専門化の進展によって逆説的に生起する〈大衆化〉の状況。それは、利潤経済に結びつくことによって哲学的思索や芸術に行きわたりつつある。「思想的危機」の分析で中井が注目したのは、思想と芸術における危機である。このような議論は、文化における近代化に関連する<sup>61</sup>。思想と芸術の領域に着目しつつ、中井は、封建的なものに対抗する役割を果たした諸観念の形骸化を指摘し、商品化や専門化の過程によって生じた新たな変化を論じている。専門化の帰結に関する議論で論じられたのが、素人との対比によって専門家が権威を獲得し、それによって専門化が促進されるような単純な過程ではないことは重要である。中井は、ある領域の専門家が、他領域の「機能」において非専門的な俗衆になるという「奇妙な構造」を抽出した。それは専門化過程がある程度まで進行することによって生じた帰結と思われる。彼の時代診断は、専門化の進行こそが、互いに非専門家である状態を生み出し、「文化の極度の専門化」が〈大衆化〉へと転化するというものであった。一九三〇年代初頭、思想と芸術の危機を論じた中井は、文化における近代化の反転をみだし、その否定的帰結と対峙しようとしていたかのようである。

中井による思想的危機の分析は、一方で、機械と俗衆によって文化の危機がもたらされるという見解を批判するものであった。他方、集团的思考のモデルないし集団主義機構の分析は、専門化や商品化、利潤的集团的組織化がもたらした思想的危機を乗り越える道を指し示す試みでもあった。それは「よりよき組織を希望する」ための準備作業だったのであり、近代性の影を描写した中井が示した一つの可能性であった。

(未完)

<sup>1</sup>五〇年代末から六〇年代にかけて、中井の機能概念は、政治的ないし美学的な観点から論じられている。特に中井の認識において実体概念がナチスと関連づけられており、それゆえ、彼が機能概念を選択したことについては、星野芳郎「解説」、『武谷三男著作集1』(勁草書房、一九六八年)、三八三頁における武谷の発言を参照。さらに、武谷三男「思い出」、久野収編『美と集団の論理』(中央公論社、一九六二年)、二四七頁にも関連する記述がある。一九六三年に『思想の科学』誌上で発表された座談会や共同討議では、中井の機能概念ないし機能主義が、機械との関連で論じら

れる。鶴見俊輔〔司会〕、栗田勇、佐々木基一、多田道太郎、永井潔、野間宏「〔座談会〕中井正一とわれわれの時代—民主主義の未来形—」、『思想の科学』第一四号(一九六三年五月号)、八三頁。多田道太郎〔報告者〕、今村太平、川添登、長谷川龍生、山田宗睦〔司会〕「〔共同討議〕中井正一・美と美学の将来について」、『思想の科学』第一六号(一九六三年七月号)、二—一九頁。同じ一九六三年に発表された論考のうち、『美・批評』における中井の機能概念と機械美について論じた重要な論考として、山田宗睦「《日本の思想雑誌》『美・批評』、『世界文化』」(『思想』一九六三年八

月)、一〇六一〇七頁を参照。七〇年代になると、関係論との関連で中井を再読するさいに参照すべき、二篇の論文が発表されている。馬場修一「大衆化の論理と集団的主体性—戸坂潤・中井正一・三木清の場合—」、江藤文夫・鶴見俊輔・山本明編『講座コミュニケーション6』(研究社、一九七三年)、一五五頁。また、杉山光信、「中井正一試論—その言語・映画の理論と弁証法の問題について—」『東京大学新聞研究所紀要』第二三号(一九七五年)、八二—九〇頁。なお、嶋啓『技術論争』(ミネルヴァ書房、一九七七年)などもある。八〇年代には、辻政太郎が『中井正一全集2』の「解説」で機能概念の問題系をとりあげ、機能概念の美学的撰取、機能論と存在論の関連、歴史的主体性の問題等を論じている。九〇年代には、拙稿「技術と媒介の社会学」、『年報人間科学』第二〇号(大阪大学人間科学部、一九九九年)、三九—四一〇頁がある。二〇〇〇年以降では、西欣也「機能主義の転向形態—中井正一の美学によつて」、『セゾナートプログラム・ジャーナル』第一〇号[特集・中井正一論/絵画考](二〇〇三年三月)があり、また、後藤嘉宏『中井正一のメディア論』(学文社、二〇〇五年)では、ミッテルと機能概念との関係や機能概念としての図書館が論じられている。

<sup>2</sup>七〇年代半ばにおいて荒川幾男は、六〇年代が二〇世紀思想史の「大きな転換点」であり、その転換は「一九世紀の西欧『近代』への決別の自覚」であったと述べている。硬直化したマルクス主義と近代主義への問い直しが行われる過程で、再吟味されたのが二〇年代と三〇年代であるという。「一九六〇年代の新しい探究が進めば進むほど、一九二〇、三〇年代の問題意識との相似が浮かび上がり、今日の思想的課題がすでに二〇、三〇年代に胚胎し用意されていた姿が明らかになる」。荒川幾男「一九三〇年代と知識人の問題」『思想』第六二四号(一九七六年六月)、三頁。この論考を含む、三〇年代日本を特集した『思想』が出版されたのち、二〇年代ヨーロッパの思潮を特集した『思想』が刊行されたのは八〇年代初頭であった。『思想』第六八八号(一九八一年一〇月)および六八九号(一九八一年十一月)参照。また、一九九〇年代には「一九三〇年代の日本思想」特集が刊行されている。『思想』第八八二号(一九九七年十二月)。今日では二〇二〇年を迎えているが、二〇二〇年代がいかなる問題意識の時代であるかは依然として明確ではない。

<sup>3</sup>海外における京都学派研究の例をあげておく。B. Stevens, « L'attrait de la phénoménologie auprès des philosophes de l'école de Kyôto », *Philosophie*, n° 79, septembre 2003.

<sup>4</sup>西田幾多郎の『意識の問題』(一九二〇年)末尾に掲載されたカント著作集刊行予定目録には、『判断力批判』の翻訳者として深田の名前が記されていた。一九二八年十一月に深田は逝去、残された訳稿は『深田康算全集 第一巻』(岩波書店、一九三〇年)に収録される。植田壽蔵の「後記」によれば、翻訳作業は「十年」に及んだ。だが、一九三二年には、大西克礼による『判断力批判』の邦訳が刊行される。

<sup>5</sup>「第三批序文前稿」は、今日、「判断力批判への第一序論」と呼ばれている。I・カント、牧野英二訳『カント全集九 判断力批判 下』(岩波書店、二〇〇〇年)。弟子のJ・S・ベックによって圧縮された『第一序論』が、完全な形で出版されたのは、カッシーラー版カント全集であった。カントの前稿とベック稿を比較した中井は、後者において抄略された *Technik* の概念について論じている。

<sup>6</sup>F・de ソッシュール、小林英夫訳『言語学原論』(岡書院、一九二八年)。知られるように、これはCh・バイイとA・セシュエによって編集された『一般言語学講義』第二版(一九二二年)の邦訳である。『言語学原論』でも、編者による「序」のなかで、学生による講義ノートを用いつつ、「第三講に土台を置き」、「出来るだけ多くの資料を利用して」、「一種の再建、総合を試みる」といった説明が翻訳されている。現代ではE・コンスタンタンやA・リードランジェによる講義ノートが邦訳されていることは周知の通りである。なお、一九九六年に発見されたソッシュールの手稿も刊行されている。F. de Saussure, *Écrits de linguistique générale, texte établi et édité par S. Bouquet et R. Engler*, Paris, Gallimard, 2002.

<sup>7</sup>ライナッハに関する中井のテキストを再読する試みとしては、拙稿「中井正一の言語活動論をいかに読むか」、『長崎県立大学国際情報学部研究紀要』第九号(二〇〇八年一月)がある。

<sup>8</sup>「意味の拡張方向並にその悲劇性」、「文学の構成」、「探偵小説の芸術性」、「絵画の不安」、「機械美の構造」、「集団美」(遺稿)、「ス

ポーツの美的要素」などである。

<sup>9</sup>『中井正一全集3』において「機械美の構造」の初出は一九二九年四月号の『思想』とされているが、掲載は、一九三〇年二月号である(巻頭の「論説」は、九鬼周造の『「いき」の構造(下)』)。

<sup>10</sup>カッシーラーも構造と機能の関係を重視した。「決定的なのはつねに、構造から機能を理解するか、それとも機能から構造を理解するかという問いであり、どちらがどちらに『基づく』とみなしたらよいかという問いなのである」。E・カッシーラー、生松敬三、木田元訳『シンボル形式の哲学 [一]』(岩波文庫、一九八九年)、三一頁。

<sup>11</sup>『美・批評』における集団的な理論構築を検討するという文脈では、創刊号の巻頭を飾った中井の機能概念論は重要と思われる。

<sup>12</sup>カッシーラーは、『認識問題』でG・W・ライプニッツの関数概念に言及した。他の哲学者の研究としては、G・フレーゲの「関数と概念」(一八九一年)、「関数とは何か」(一九〇四年)がある。野本和幸・黒田亘編『フレーゲ著作集4 哲学論集』(勁草書房、一九九九年)。また、数学者・哲学者のA・N・ホワイトヘッドが一九一一年に刊行した著作、『数学入門』(松籟社、一九八三年)は「関数」についての章を含む。なお、本稿は中井の機能概念に照準を合わせることにする。

<sup>13</sup>中井による実体概念についての説明は、時期によって異なる。「機能概念の美学への寄与」では、多くの物に共通する性質が抽象され、「同一の性質を有する物体」を一つの類へと結合することで概念が誕生すると中井は述べる。しかし、「委員会の論理」では、物に共通する性質が抽象された後、「その性質を一つの類に結合する」と表現が修正されている。この点について本文中で行った説明は、「委員会の論理」に依拠したものであるので注意されたい。

<sup>14</sup>E・カッシーラー、山本義隆訳『実体概念と関数概念』(みすず書房、一九七九年)、六頁。

<sup>15</sup>中井正一「機能概念の美学への寄与」『哲学研究』第一七六号(一九三〇年十一月号)、三七頁。

<sup>16</sup>E・カッシーラー、前掲書、九頁。

<sup>17</sup>実体論批判は、必ずしもモナド論批判を意味しない。「モナド」は、伝統的な意味における実体、つまり変化と時間を超えた事物ではない。モナドは、力であり、モナドは活動の中心である(イェール大学におけるゼミナールの講義原稿)。E・カッシーラー、D・P・ヴィーリン編、神野慧一郎、米沢徳積、藪田坦、中才敏郎訳『象徴・神話・文化』(ミネルヴァ書房、一九八五年)、一一九頁。カッシーラーが『認識問題』でライプニッツの関数概念を論じたことも興味深い。

<sup>18</sup>中井、前掲論文、四二頁。馬場和光訳述の『実体概念と関係概念』には、中井の文と類似した一節がある。「此『物』とは決して総ての関係の以前に存在する独立的なる存在を意味しない。寧ろ其は、其が数学者の言ふ物である限り、数学者によりて言はるゝ関係に依つてのみその全体の内容を得るものなのである。」E・カッシーラー、馬場和光訳述『実体概念と関係概念』(大村書店、一九二六年)、二四頁。馬場訳の場合、「関係」という言葉はあれども「機能的」という言葉は用いられていない。

<sup>19</sup>中井、前掲論文、四三頁。カッシーラーの関数概念においても要素は相互的に規定される。「すでに数学的研究は、単なる〈量〉の考察を越え、〈関数〉の一般理論に転じている[……]そこで新しい統一に統合される『要素』とは、『部分』としてひとつの〈全体〉を作る外延的量ではなく、相互的に規定され、したがって依属の〈体系〉に結び合さるべき関数形式なのである。」E・カッシーラー、山本義隆訳『実体概念と関数概念』(みすず書房、一九七九年)、八九頁。

<sup>20</sup>中井、前掲論文、四四—四五頁。

<sup>21</sup>カッシーラー、前掲書、三一八頁。

<sup>22</sup>中井、前掲論文、四六頁。

<sup>23</sup>「機能概念の美学への寄与」には、『シンボル形式の哲学』第三巻への言及がある。「カッシーラーが指摘する様に心身の関係はその関係そのものが存在の機能関係の象徴的な原型 *Vorbild* であり、範型 *Musterbild* である。〈表情〉現象における心と身体の絡み合いをめぐる議論は興味深い、第三巻で集合論のパラドックスが論じられていたことにも、中井の明確な言及がないとはいえ、留意す



べきである。第三巻は、不完全性定理に関するK・ゲーデルの論文が発表される前の一九二九年に刊行されているが、佐々木力の『二十世紀数学思想』（みすず書房、二〇〇一年）には、数学基礎論論争と関連してこの著作を位置づけた記述がある。なお、数学基礎論論争にかんしては、詳細な解説の付された邦訳書、K・ゲーデル、林晋／八杉満利子訳・解説『不完全性定理』（岩波文庫、二〇〇六年）があり、日本におけるゲーデル受容については、田中一之編『ゲーデルと20世紀の論理学』（東京大学出版会、二〇〇六年）がある。

<sup>24</sup>「模写論的美学的関連」で中井は、カッシーラーが機能概念を技術の領域にまで適用しなかったと述べている。しかし、J・M・クロイスによれば、カッシーラーの「形式と技術」を収めた論集『芸術と技術』（一九三〇年）は、「限定版として出版され、予約購読者しか販売されなかったため、[……] 結果として入手困難となり、カッシーラー受容の過程ですっかり見過ごされてしまった。E・カッシーラー、篠木芳夫・高野敏行訳『シンボル・技術・言語』（法政大学出版局、一九九九年）、八頁。クロイスによれば、この論文では、言語や神話の研究と同様、技術が一つの文化現象として研究されている。「技術はシンボル形式の一つ」である。

<sup>25</sup>中井正一「機能概念の美学への寄与」『美・批評』第一号（一九三〇年九月号）、五頁。

<sup>26</sup>中井正一「機能概念の美学への寄与」『哲学研究』第一七六号（一九三〇年十一月号）、五三頁。

<sup>27</sup>中井は、単純感覚が「感覚の複合」であり、「深い関係」であるとする。同書、五七～五八頁。

<sup>28</sup>中井、前掲論文、七二頁。中井が編集に従事した『深田康算全集 第二巻』の前半には、感情移入に関する論考が数多く収録されている（一九三〇年一月二〇日発行。中井による二篇の「機能概念の美学への寄与」は、『美・批評』の九月号、及び『哲学研究』の一月月号に掲載されている）。深田によれば、Th・リップスの感情移入は、「対象と自我感情との融合同一の状態」であり、主客同一を意味するが、「主観が主で客観が客であることを意味する如き」感情移入という術語は不当であるという。『深田康算全集 第二巻』（岩波書店、一九三〇年）、八一頁。

<sup>29</sup>中井正一「機械美の構造」『思想』第九三三号（一九三〇年二月号）、七〇頁。

<sup>30</sup>中井正一「機能概念の美学への寄与」『美・批評』第一号（一九三〇年九月号）、七頁。

<sup>31</sup>中井正一「機能概念の美学への寄与」『哲学研究』第一七六号（一九三〇年十一月号）、七二頁。

<sup>32</sup>「Subjektの問題」（一九三五年）には、自我を関係としてのみ捉える見解への警告もある。

<sup>33</sup>中井正一「機能概念の美学への寄与」『哲学研究』第一七六号（一九三〇年十一月号）、七五頁。

<sup>34</sup>『シンボル形式の哲学』第二巻で、カッシーラーはエルンスト・カップの「器官-投射」説を紹介している。それによれば、ハンマーや手斧、ナイフなど、原始的な手工具は「その形と機能においてまさしく手の延長」であり、「手の力を強める」。この見方は、工場の機械や武器、芸術と機械技術に属するあらゆる人工物に拡張される。人工物は、有機組織をモデルとして人間が作り出したものであるのだが、人間は、自らが作り出した人工物によって、今度は、自分の「身体の性質や構造を理解することを学ぶ」。「器官-投射」説の深い意味はこれにとどまるものではない。人間が発見する新たな道具は、単に「外界の形成」を意味するのみならず、人間の「自己意識の形成へ向かう新たな一歩」でもある。E・カッシーラー、生松敬三、木田元訳『シンボル形式の哲学 [二]』（岩波文庫、一九九一年）、四〇二～四〇四頁。なお、「模写論的美学的関連」が掲載された『美・批評』第二八号（一九三四年五月）には、編集部による技術と芸術に関する文献表が掲載されており、そこにカップの『技術の哲学』についての記載がある（同年一月三十一日、美・批評研究会において中井は「美と技術の問題のために」と題する報告を行っていた）。

<sup>35</sup>テクノロジーを含めた錯綜した諸関係の中に認識能力を位置づける発想が、現代フランスのコミュニケーション研究にみられる。D・ブーニューによれば、哲学者たちは久しく、ア・ブリオリな能力であるかのように理性を各主体の内部に位置づけてき

た。この生得説、あるいは自我中心主義に対して、情報コミュニケーション科学は、関係性を一次的なもののみなし、社会技術的なネットワークの中に存する理性の外在性を記述することに寄与してきた。D. Bounoux, *Introduction aux sciences de la communication*, Paris, La Découverte, 1998, p. 5. 彼はまた、カント的な超越論的主体を技術と集団の歴史によって再定義するアプローチにも言及している。D. Bounoux, *Sciences de l'information et de la communication*, collection « Textes essentiels », Paris, Larousse, 1993, p. 15.

<sup>36</sup>この論文の原型は京都大学哲学学会の公開講演会（「美の転向とその課題」一九三二年）といわれるが、両者の相違も指摘されている。

<sup>37</sup>「芸術に於ける媒介の問題」『思想』第二七五号（一九四七年二月）、三八頁。

<sup>38</sup>一九三〇年頃の中井の論考のうち、存在論への関心を顕著に示すものとしては、一九三〇年に発表された「絵画の不安」、一九三一年の「芸術的空間 演劇の機構について」や「芸術の人間学的考察」がある。不安を伴う「問い」と不安なき饒舌の対比される

「絵画の不安」（一九三〇年）では、技術による「見る機能<sup>フュクティオン</sup>の異常なる発展」についても述べられており、存在論と機能論の交差がみられる。中井正一「絵画の不安」、久野収編『中井正一全集 2』（美術出版社、一九八一年）、一六九―一七八頁。

<sup>39</sup>中井正一「ノイエ・ザツハリツヒカイトの美学」『美・批評』第一七号（一九三二年）、五頁。

<sup>40</sup>両者の関係については次を参照。E・カッシーラー、M・ハイデガー、T・カッシーラー、岩尾龍太郎・真知子訳『ダヴォス討論』（『リキエスタ』の会、二〇〇一年）。M・ハイデッガー、細谷貞雄訳『存在と時間 上』（ちくま学芸文庫、一九九四年）、二〇二頁。E・カッシーラー、宮田光雄『国家の神話』（創文社、一九六〇年）、三八八頁。M・フリードマンは、分析哲学と大陸哲学の対立という文脈からダヴォス討論を論じる。フリードマンはまた、E・カッシーラーを、R・カルナップとM・ハイデガーの間に位置づけている。M. Friedman, « Carnap, Cassirer, and Heidegger: The Davos Disputation and Twentieth-Century Philosophy », <https://philpapers.org/rec/FRICCA-2>, page consultée le 26 octobre 2020.

<sup>41</sup>中井、前掲論文、六頁。

<sup>42</sup>同書、七頁。中井における射影の概念は、時期によって異なる。「模写論的美学的関連」（一九三四年）では、意識が行動の射影の関係と規定されており、反射としての直接射影、反映としての上部射影、模写としての基礎射影に分類される。とりわけ、認識の達しない深さにおいて自らの状況を正射影し、把持しているところの「基礎射影」が重要な意味をもつ。戦後の論考では、フッサールの時間論との関連で「射影的連続的今」という言葉が用いられている。「[……] 音が連続している場合、その連続の全ての点に於て、薄れゆく過去の全系列が射影している。この流れ行く現在の一点に、全ての過去の全系列が射影していることで、我々は一つの連続した意識を持ち、全ての点も又連続を有つのである。」中井正一「芸術に於ける媒介の問題」『思想』第二七五号（一九四七年二月号）、三〇頁。

<sup>43</sup>V・ファリアスやJ・デリダの著作など、ハイデガーとナチスに関する文献は多様だが、ここでは三〇年代日本の文献を指摘しておく。「ハイデッガーと哲学の運命」（一九三三年）における三木清によれば、ハイデガーのナチス入党が報道されたのち、田辺元が『東京朝日新聞』で批判を書いた。三木自身も、「不安の思想とその超克」（一九三三年）でハイデガーを批判している。「不安の哲学が自己の転化を企てる時、容易にファシズムの哲学ともなり得るのである。」『三木清全集 第十巻』（岩波書店、一九六七年）、三〇一頁。

<sup>44</sup>中井正一「模写論的美学的関連——一つの草稿——」、『美・批評』第二八号（一九三四年五月号）、五頁。

<sup>45</sup>「Subjektの問題」（一九三五年）で中井は、当時の現象学派の哲学が「血的主体」と結合した時、「党派の役割」を果たす危険があると述べている。中井正一「Subjektの問題」『思想』第一六〇号（一九三五年九月号）、五五頁。

<sup>46</sup>久野収「解説」、中井正一『美学入門』（河出書房、一九五一年）、一五三頁。

<sup>47</sup>中井正一「集団美」、久野収編『中井正一全集 2』（美術出版社、一九八一年）、一八四頁。

<sup>48</sup>中井正一「スポーツ気分の構造」『思想』第一三二号（一九三三年五月号）、九九頁。

<sup>49</sup>中井正一「スポーツ美の構造」（執筆年月不明）、久野収編『中井正一全集1』（美術出版社、一九八一年）、四二八頁。

<sup>50</sup>辻部政太郎「集团的性格の断片」『美・批評』第六号（一九三一年三月号）。

<sup>51</sup>中井正一「物理的集团的性格」『美・批評』第八号（一九三一年五月号）、二四三頁。

<sup>52</sup>同書、二四七頁。

<sup>53</sup>中井正一「機械美の構造」『思想』第九三号（一九三〇年二月号）六五頁。

<sup>54</sup>中井正一「思想的危機に於ける芸術並にその動向」『理想』第三五号（一九三二年九月号）、一三三頁。この論考が掲載された『理想』第三五号は、「思想的危機の検討」の特集号である。巻頭論文は、三木清の「危機意識の哲学的解明」であった。三木によると、思想の危機の時代には、その真偽ではなく、進歩的か反動的かといった思想の性格、すなわち「思想の効果」が問題になる。三木は、これ以前にも思想の危機について論じていた。「危機における理論的意識」（一九二九年）によれば、思想の危機は、特定の思想が反対の思想へ転化することである。思想の自己同一性を維持しようとする限りで、思想の転化は危機として現れる。しかし、自己批判を通じて自己の制限性や偏見が自覚されると、対立物への推移が生じる。この推移が思想の危機であり、危機的とは批判的ということである。この意味における思想の危機を、三木は、思想の運動と発展を生み出すものとして肯定する。三木清「危機における理論的意識」、『三木清全集 第二巻』（岩波書店、一九六六年）。しかし、権力の問題を導入する時、この議論は、変更を迫られるであろう。

<sup>55</sup>多田道太郎「中井正一『美と集団の論理』」、桑原武夫編『日本の名著』（中公新書、一九六二年）は、危機に関する中井の論文を「委員会の論理」の「原型」と見なす。だが、「委員会の論理」では、投企と被投の関係に変化がみられる。また、一九三六年以前

の論考の内容が「委員会の論理」に盛りこまれた例は、これ以外にもある。

<sup>56</sup>「現代美学の危機と映画理論」（一九五〇年）など、中井はこれ以外にも「危機」にかんする論文を執筆している。

<sup>57</sup>文化（culture）の現代的意味については次を参照。R. Bocoock, « The cultural Formations of Modern Society », in S. Hall et al. (ed), *Modernity*; Cambridge, Polity Press, 1995, pp.151-154.

<sup>58</sup>戸坂潤によれば、文化の危機は必ずしも学術的・技術的水準の低下ではなく、旧思想文化にとっての危険を意味する場合がある。文化危機を救済するとして生じたのがファッション的文化政策である。つまり、文化救済が新たな文化危機を引き起こしているのである。戸坂は、「思想水準の高まりを抑え」るために社会科学が冷遇されている状況も指摘する。戸坂潤「文化の危機とは何か」、『戸坂潤全集 第五巻』（勁草書房、一九六七年）、六七頁。

<sup>59</sup>中井、前掲論文、一二七頁。

<sup>60</sup>ホセ・オルテガ・イ・ガセットの『大衆の反逆』にも、専門家が「大衆である」という視点がみられる。彼は科学者に「大衆の人間の原型」を見たが、危機論文の中井は、「機能」という言葉を用い、主に思想や芸術の領域に注目しつつ専門家が俗衆に転化する点を論じた。さらに、互いに大衆となっていることを気づかない状態を、中井があえて「精神的貴族化」と名づけて批判したことは、用語の選択の問題とはいえ、大きな相違と思われる。

<sup>61</sup>危機論文は、戦後、『近代美の研究』（三一書房、一九四七年）に収録される。ただし、これは、広島県知事選挙に立候補する費用にあてるために出版された書物であり、中井の「あとがき」によれば、書名や内容は「久野収、新村猛、辻部政太郎、富岡益五郎、三一書房竹村氏その他の方々によつて決定され、編集された」（辻部政太郎によると、映画論は本人の希望で収録された）。なお、この著作には、「近代美と世界観」という論考も含まれている（前年の『映画芸術』に掲載された「映画美と世界観」を改稿したもの）。